

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

<https://doi.org/10.15017/458567>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2003, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

はない。著者らは、出産後数日の母親にマタニティブルーが発生しやすいことから、これは「発達危機」(Erikson,1959; Caplan,1961)であり、この発生は母親となる発達課題を達成することの困難性を体験している母親に現れやすいのではないかと考えている(宮中ら,1994)。すなわち、女性は母親になる過程において、心理社会的な発達危機に遭遇するといわれている。その危機とは、ライフサイクル上の発達課題に向かう時、障害に直面し、これまでの対処方法を用いても克服できず、混乱し動転している時期で、次の発達課題での変換点でもある(Caplan,1968;Aguilera と Messick,1974)。こうした女性の心理社会的側面の発達の視点からの先行研究として、母性意識に関する、平井(1981)、新道ら(1985)、大日向(1988)の報告があるが、マタニティブルーとの関連性については言及されていない。

そこで、第IV部では、心理社会的な側面から、妊娠期および産褥期の母性意識と、出産後の抑鬱傾向との関連性について検討した。

第2章 対象と調査方法

第1節 対象と調査方法

第1項 調査対象

研究目的、プライバシーの保護、研究協力は任意であることを十分説明した上で、承諾の得られた母親を対象者とした。その対象者は、1991年4月～1992年3月までに、京都府、大阪府、山口県の計5病院において出産した母親で、かつ、妊娠・分娩に異常がある者や精神疾患の既往がある者を除外した270名(有効回答率100%)である。除外した理由は、自己記入式質問紙調査により身体回復に悪影響の恐れがあることや、調査結果へのバイアスが生じる可能性のためである。

その対象者の属性については、表IV-1に示した。母親の年齢は、20歳代と30歳代が主流であり、その平均年齢は28.6(標準偏差3.9)歳であった。母親のうち、初産婦が約6割、家族構成のうち約8割以上が核家族、職業をもっている母親が約2割強、里帰り分娩者は約6割であった。また、夫の平均年齢は31.3

(4.4) 歳で、妻との年齢差は 2.7 歳であった。本調査年度 (1991) における全国の母集団では出産年齢が 28.9 歳で、夫と妻の年齢差が 2.6 歳であり、本調査の標本集団との間で有意な差が認められなかった (t 検定) (厚生統計協会, 1993)。また、母親の就労率については、全国平均の 0～3 歳児の母親 27.1 % に比較しやや少ない。核家族の占める割合は全国平均の 75.6 % に比較しやや多い。さらに、全国平均で第 1 子が占める割合は 45.1 % に比して、本対象では 61.1 % でやや多い。児の性別は男児 51.8 %、女児 48.2 % で、全国平均とほぼ同様であった。いずれの属性についても全国の母集団と本調査の対象集団との間では、統計学的有意差が認められていない (厚生統計協会, 1993; 日本子ども家庭総合研究所, 1994)。

第 2 項 調査方法

出産後 4 日目の母親に、自己記入式質問紙調査を手渡して依頼した。記入後は封筒に入れ留め置きとし、後日回収した。調査を出産後 4 日目に行ったのは、マタニティブルーの発症時期とされるのは出産後 3～4 日であること (Pitt, 1968) や、出産体験を想起するのに適切な時期は出産後 48 時間以内とされること (和田ら, 1986) などを参考とし、出産による身体疲労を考えると、この時期が適切と考えたためである。

表IV-1 対象者の属性

N=270

母親の年齢	19歳	1人 (0.4%)
	20歳～29歳	154人 (57.0%)
	30歳～39歳	110人 (40.7%)
	40歳	5人 (1.9%)
	平均	28.6±3.9歳
父親の年齢	19歳	1人 (0.4%)
	20歳～29歳	64人 (23.7%)
	30歳～39歳	128人 (47.4%)
	40歳～45歳	9人 (3.3%)
	不明	68人 (25.2%)
	平均	31.3±4.4歳
初経別	初産婦	165人 (61.1%)
	経産婦	105人 (38.9%)
家族構成	核家族	224人 (83.0%)
	3世代家族	46人 (17.0%)
母親の就労	あり	64人 (23.7%)
	なし	206人 (76.3%)
里帰り分娩	した	161人 (59.6%)
	していない	109人 (40.4%)
児の性別	男児	116人 (51.8%)
	女児	108人 (48.2%)
出生順位	第1子	165人 (61.1%)
	第2子	65人 (24.0%)
	第3子	35人 (13.0%)
	第4子	5人 (1.9%)

第2節 母親に対する質問項目

第1項 属性項目

母親および父親の年齢，初産・経産別，家族構成，就労の有無，里帰り分娩の有無，児の性別，児の出生順位などとした。

第2項 妊娠期・産褥期の母性意識，出産体験

妊娠期および産褥期の母性意識，出産体験に関しては，先行研究（平井，1981；新道ら，1985；大日向ら，1988）を参考として作成した宮中ら（1993）の産前と産後の母性意識の質問票を用い，あわせて，出産体験に関する質問項目も別に加えた。したがって，この質問調査票は，第Ⅱ部および第Ⅲ部の「母親意識」で用いたものとは異なっている。この母性意識と出産体験に関する質問項目は，表Ⅳ-2に示したように，妊娠期および産褥期におけるそれぞれの母性意識と，さらに出産体験に関わるものの3つから構成されている。妊娠期の母性意識に関する質問は6項目からなり，妊娠の受容や出産への期待や不安に関する内容となっている。また，産褥早期の母性意識に関する質問は8項目からなり，それらは出産後4日目までの児との相互作用や児への愛着に関する内容となっている。さらに，出産体験に関する質問8項目は，出産体験の想起（review）に関する先行研究（和田，近藤，1986）を参考とし，出産体験の満足感や喪失感に関する内容とした。

表Ⅳ-2 妊娠期母性意識，産褥期母性意識，出産体験に関する質問項目

妊娠期の母性意識	産褥期の母性意識	出産体験
児の出生が待ち遠しい	児と一緒に嬉しい	分娩を終えて満足した
妊娠して嬉しい	児が母乳を吸うと嬉しい	分娩を終えた自分は我慢強いと思う
妊娠中胎児を気遣った	児を抱くとフィットする	分娩は感動した
親としての実感がわいた	児は私をじっと見てくれる	苦痛は耐えられなかった
出産が近づくのは不安だった	児が泣くと何かしたくなる	女性に生まれ幸せだと思った
妊娠中の生活は快適だった	児を抱くのは怖い	取り乱して自分を失いそうだった
	児が泣くとイライラする	分娩中自分より児のことしか考えられなかった
	児の匂いはいや	分娩はうまくできなかった

第3項 抑鬱傾向

抑鬱傾向に関する質問項目は、表IV-3に示したように、Zung (1965) の自己評価式抑鬱尺度 (Zung's a Self-Rating Depression Scale, 以下SDSと略す) の全20項目に加えて、Pitt (1968) のマタニティブルー評価尺度の9項目中から5項目を含めた、計25項目とした。一般的な抑鬱傾向を測定する尺度には、Hamilton (1962) の専門職の面接による他者評価の21項目の他、質問項目数が多いことや、鬱病の診断を目的としているなど、マタニティブルーの尺度としては適さない。Zung (1965) のSDSは自己評価式で、項目数も20項目と比較的少なく、かつ簡便に利用できるため、鬱病のスクリーニングに用いている (新野, 1989) ものであるが、マタニティブルーの調査 (高橋, 1986, 池本 1986) にも用いられている。質問項目は肯定的内容と否定的内容とが10問ずつで構成されている。本論では、否定的質問項目を肯定的質問項目と思い込んで不注意に答えることが多いため、全て否定的内容の質問形式とした。また、20項目のうち、原法では「自分は死んだほうが人のためになると思う」は、母親に与える精神的影響を考慮し、「自分はいないほうが人のためになると思う」と改変して利用した。またPitt (1968) のマタニティブルー評価尺度は原法では9項目であるが、SDSと類似の項目が4項目あるため、これをを除く5項目とした。各々の項目については、4段階のLikert尺度とした。

表IV-3 抑鬱傾向に関する質問項目

Zung 自己評価式抑鬱尺度	Pitt マタニティブルー尺度
何となく疲れる (疲労感)	赤ちゃんに対して必要以上に心配する (児の憂慮)
性的な関心がない (性的関心低下)	頭が痛い、重たい (頭痛)
夜よく眠れない (睡眠障害)	力が抜けたように感じる (脱力感)
便秘がちだ (便秘)	何となく不安だ (不安感)
何事も気楽にやれない (集中力低下)	悲しくさびしい感じがする (悲哀感)
気分がすっきりしない (精神運動静止)	
落ち着かずじっとしてられない (精神運動焦燥)	
泣いたり泣きたくなったりする (涙もろさ)	
気が沈んで憂鬱だ (抑鬱気分)	
決断ができない (決断困難)	
自分の人生は充実していない (人生無力感)	
満足感が感じられない (不満足感)	
普段よりいらいらする (イライラ感)	
自分は役に立たない人間のように思う (自己過小評価)	
普段より動悸がする (動悸)	
食欲がない (食欲減退)	
普段よりやせてきたように思う (体重減少)	
朝方が一番気分が悪い (朝方抑鬱)	
将来に希望が持てない (希望喪失)	
自分はいないほうが人のためになると思う (希死念慮)	

第3節 分析方法

第1項 母親への質問紙の回答の解析処理

母親の属性については、回答の各々の選択肢の比率を算出した。妊娠期の母性意識6項目、産褥早期の母性意識8項目、出産体験8項目については、いずれも3つの選択肢を設け、肯定的質問項目には、「はい」に3点、「どちらともいえない」に2点、「いいえ」に1点をそれぞれ配点し、また、否定的質問項目には逆に配点した上で、全ての項目の合計得点を求めた。

抑鬱尺度における4段階の選択肢には、「いつも (most of the time)」に4点、「たいてい (good part of the time)」に3点、「ときどき (some of the time)」に2点、「いいえ (a little of the time)」に1点を、それぞれ原法通り配点し、その合計得点を算出した。

母親の年齢、初産・経産歴、家族構成、職業、および里帰りの有無をそれぞれ説明変数に、抑鬱の合計得点、妊娠期母性意識と産褥期の母性意識の合計得点および出産体験の合計得点を目的変数とする重回帰分析を実施し、どの属性に有意な関連がみられるかを検討した。なお、年齢は30歳未満を1に、30歳以上を2に、初産・経産別については、初産婦を1、経産婦を2に、家族構成については「核家族」を1、「三世帯家族」を2に、就労については「職業有り」を1、「職業なし」を2に、里帰り状況については「里にかえって分娩した」を1、「里に帰らずに分娩」を2に、児の性別については、男児に1、女児に2を、児の出生順位については、第1子を1、2子を2、3子を3、4子を4にと、それぞれダミー変数に置き換えて重相関係数を求めた。また、妊娠期母性意識と産褥期の母性意識の合計得点および出産体験の合計得点と、抑鬱の合計得点との間の相関係数を求めることにより関連性を検討した。

次に、抑鬱の合計得点は、その得点分布を考慮し、Zung (1965) の抑鬱の指標を参考として、抑鬱群と非抑鬱群に2分類した。その上で、抑鬱傾向の「抑鬱群」と「非抑鬱群」の2群間と、属性項目との関連性を、また、妊娠期の母性意識、産褥期の母性意識、および出産体験に関する質問項目の回答の「はい」と「どちらともいえない・いいえ」との2群間の回答率を比較検討した。解析は χ^2 検定を用い、有意水準を危険率5%とした。